

礼拝の観光学 その2

正信 公章

— 承 前 —

16) パリピーダムに、我々にある悪い諸性質を献供しておいたのち、幸あるコーイルのピラガーラム（周壁）を右回りすること。3度、右回りすること。〔両〕手を頭の上で合わせたまま、右回りすること。そのように右回りするときに、心を浄化する礼拝詩節を歌ってくることで、心はきれいに輝く。ティルヴァルットパー、ティルップガル（アルナギリナーダル作）をはじめとする恵みの詩節をも、想いも唱えもしてくることである。幸あるスツル〔ピラガーラム〕を右回りするとき、それぞれの場所に形をなしている一つ一つの尊像をしっかりと拝んでくること。幸あるスツルのうちに、タッチナムールッティが形をなしている。そこで拝むとき、師の形をなして、サナガン等の賢者4人（他はサナックマーラン、サナンダン、サナーダン）みなに教示する尊像の姿が、シンムッティライ（「知」の印契）を示す。小指を短指といわれる大指と合わせ、ほかの3本の指をともに上げてみせるのが、シンムッティライである。大指はイライヴァン、小指はもろもろの命、双方とも合わさることを要するが、思い上がり、罪業、まやかしといわれる3つの過ちをともに捨て去ることを要す。これを教示するのが、シンムッティライ。このような思いが、タッチナムールッティの前で心にとどまることを要す。

17) 幸あるスツルを右回りしたのち、ヴィナーヤガルを礼拝すること。カンニの方角（西南）に、ヴィナーヤガルの神前は位置している。カルッパッキラハム（内室）の⁷⁾右（むかって左）の部分に形をなしている。そのヴィナーヤガルのおん前にいて、礼拝すること。

18) ヴィナーヤガルを礼拝する作法は、独特のもの。額の両側の、右手で左の方を、また左手で右の方を、3度たたくこと。右手で左耳を、また左手で右耳をつかんでトープッカラム（手は述べた状態のまま、しゃがんでは立つ動作）を科すこと。トープッカラムも、3度科すこと。そののち、胸の真ん前で手を合わせて礼拝すること。

19) こんなふうにはヴィナーヤガルを礼拝することの意味は何か？ 学校で生徒たちが過ちを仕出かしたら彼らに与えられる罰が、トープッカラムにほかならない。罰にあたるトープッカラムを我々が科すわけはといえば、我々の過ちに我々自身が気づいて、我々に我々自身があえて罰を与えるのが、この礼拝の意味である。過ちに苦しんで、罰をすすんでうけて、もうこのような過ちをすまいと誓う、まさにそのためにこの礼拝作法はできている。カダヴルの恵みを得るための妨げとなることを我々がする過ち。その過ちを想って、苦しんで、許しを求めるのも、もう過ちをおかさない誓うのも、イライの恵みを得るためになくってはならないことである。ヴィッキナムといたら障害、障害をニーク（「除去」）するイスヴァラン（神）ということで、ヴィナーヤガル、またヴィッキネースヴァラルと呼ばれている。

20) 過失を祓うということで、テーンガーイをぶつけて砕け散るように我々はしている。このことの内なる意味は何かといえば、罪過の体現とテーンガーイをうけとめると、ヴィナーヤガルを礼拝したことで、その罪過が砕け散ったということにほかならない。砕ける実をぶつけるというのも、このことをいうのである。罪過が砕け散ったことの、これは一つの象徴。

21) ヴィナーヤガルを礼拝するときは、ヴィナーヤガルを称讃する詩節をこそ歌うこと。例として、

5本の手をもつ者を⁸⁾、象の顔をした者を、
インドゥ（月神）の若月のような牙の者を、
ナンディ（シヴァ神）の息子を、知識の若芽を、
おもいうかべて、しもべの私はいま、讃えている。

といった詩節（未詳）をヴィナーヤガルの前で歌って、礼拝することである。

誓願も、なすべきつとめ〔も〕、成功も、適切な言いまわし〔も〕、
力あることばも、威信も、富も、実現する〔存在〕——
そんなわけで、天空の者たちも、象の顔をした者に、
心ひかれて、合わせることになるのだ、自分の手を。

といった詩節（未詳）をも歌うことである。

22) ヴィナーヤガルの礼拝がすんだら、本尊を拝みにいくまえに、トゥヴァーラバーラガル（入口警固の男性神格）たちのところに先ず行って、

「つまらぬ者である私が、中に入ってイライヴァンもしくはイライヴィを礼拝するために、御身らが許可を与えることを願う」

と請い願うこと。

イライヴァンの幸あるコーイルにトゥヴァーラバーラガルたちも、イライヴィの幸あるコーイルにトゥヴァーラバーラギ（入口警固の女性神格）たちも、形をなしている。彼らに請い願ったのち、イライヴァンなりイライヴィなり礼拝しに行くこと。

23) アルッチャガル（司祭）といわれるシヴァーッチャーリヤール（シヴァ教の導師）は、我々のためにイライヴァンを供養する方である。その方がイライヴァンのご神体に聖水をかけて、もろもろのプーサイをして礼拝するやり方が踏襲されている。

24) 本尊が形をとっている所は、カルッパッキラハム（「胎児の家」）と北の言葉ではいわれる。タミルでは、これをカルヴァライ（「胎児の部屋」）というのが、好いとされるやり方。アルッチャガルが立って礼拝をおこなう所は、アルッタマンダバム（中次ぎの間）といわれる。信愛の徒たちが立って礼拝する所は、マハーマンダバム（大広間）といわれる。本尊の右（むかって左）側に立って、アルッチャガルはプーサイをする。

25) 本尊の名で、幸あるコーイルは名を得る。パリヤニヤーンダヴァルが本尊としてコーイルを得ていたなら、パリヤニヤーンダヴァルの幸あるコーイルといわれる。トゥルッカイヤンマンが本尊として形をとったコーイルは、そのままトゥルッカイヤンマンのコーイルといわれる。これとは異なっている場合もある。ティルヴァールールの幸あるコーイルは、ただティヤーガラージャスヴァーミの幸あるコーイルとの名を得ている。であっても、ここで本尊としてコーイルを得て恵みをもたらす方は、〔長期間、不動の姿勢をとりつづけたために〕蟻塚の代わりとなった方、ヴァンミーガナーダルである。

26) イライヴァンもしくはイライヴィの右（むかって左）側に男たち、また左（むかって右）側に女たちが立って礼拝すること。一般に、神前に立って礼拝する信愛の徒たちは、うしろにいる者たちが拝観するのをさえぎって見えなくしないように立つのがよい。皆ともに⁹⁾ 礼拝することのできる仕方で、帰依者たちが幸あるコーイルの礼拝をおこなうことが認められているのである。

27) 本尊に礼拝をおこなったのち、その真向かいに形をとっているヴァーハナム（乗用の神格）に礼拝がおこなわれる。大神シヴァンのヴァーハナムは、若い牡牛である。これをリシャバムあるいはナンディという。ヴィナーヤガルのヴァーハナムは、麝香鼠である。幸あるムルガンのヴァーハナムは、孔雀である。ティルマールのヴァーハナムは、カルダンである。このように、プーサナイ（プーサイ）がおこなわれるとき、我々の思いをヴァーハナムにとどめて、それらが我々に気づかせることがらに気づくこと。それらがどれほど、ただイライヴァンのほうを向いたままいることか、そのように我々も、イライヴァンの幸ある顔のほうを向いてこそ生きなければならない。母親の胸で乳を飲む子は、母親の顔のほうをこそ向く。そのように我々もイライの恵みによって、あらゆる幸せをも豊かさをも得て生きご利益を得ている。イライヴァンを見て、喜んで、我々の感謝の気持ち強くする必要はないか？ まさにこのことを、ヴァーハナムから我々は学んでいるのである。

28) のち、カルヴァライの左（むかって右）側にある大神ムルガンの神前で礼拝がおこなわれる。ムルガンを讃える礼拝詩節を歌うことである。「オーム サラヴァナバヴァーヤ ナマ」、「オーム カンダーヤ ナマ」のような〔、ムルガンへの表敬〕唱句を唱えても礼拝することである。16回、唱句を唱えることである。108回唱えても礼拝することである。

ムルガンということば自体には、美しい者との意味がある。ムルグということばには、

美、若さ、香り、蜜、カダヴルそのもののあり方といった意味があるともいい、失われることのない美をそなえる者、故に、ムルガンと讃えられているともいう。若さとか、いい香りとか、蜜みたいな甘さ、さらには、完全である、カダヴルそのもののあり方——これらは、ムルガンということばのなかに隠されている意味である。

29) ムルガンの神前で、ムルガンを讃える詩節のいくつかを歌って礼拝することである。例に1つ。カンダル・アランガーラム（アルナギリナーダル作）の詩節。

おみ足も、足飾りも、鳴る足環〔も〕、突き刺す、
闘いの長槍も、カダンプ〔の花の首飾り〕も、太い腕の6対も、
香りというかたちの顔の6つも、花の眼も、
師という〔一つの〕姿となってやってきて、私の心は喜びのあまり、跳びはねたことだよ。

30) ついで、サンデースヴァラルを礼拝すること。コーイルの左（むかって右）側は、小さな空間をのこして形づくられている。本尊のために用意される花づなも、ナイヴェエッティヤム（神饌）の残りさえも、この方のプーサイにかなう¹⁰⁾ものである。この方は、カダヴルの幸ある恵みを得たアディヤール。いつもシヴァンを念想する。コーイルの礼拝がいずれもすんだのち、この方を拝むこと。念想中であるこの方を、3回手をたたいて、我々を見るようにすること。シヴァンの拝観の効果をもたらすように、この方に頼むこと。

—その3につづく—

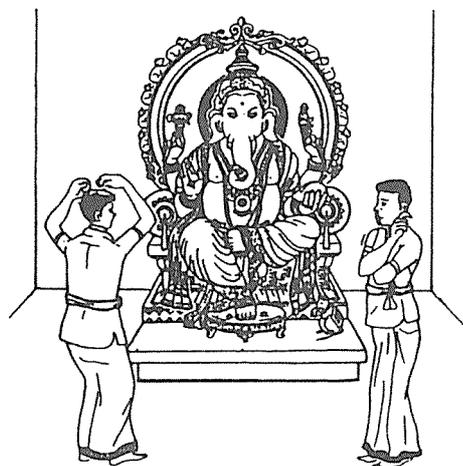
注 7) kirakattuktu を kirakattukku になおしてよむ。

8) 同じ詩節を伝える他の例にもとづき、karantanai を karattanai でよむ。Gopalan Kanna(ed.), *Sri Siva Subramaniya Swami Temple, Māha (sic)kumbhābhishēkam, Souvenir Programe, 15th July 1994, Nadi 1994*, 口絵1頁下参照。

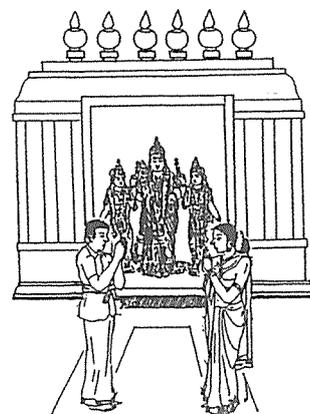
9) elvārum を ellārum になおしてよむ。

10) pūcaikk-uriya- を pūcaikk-uriya- でよむ。

挿図 文18)



文28)



正面中央がムルガン

(アジア文化学科 教授)